

【論 文】

チェーホフと「共通の思想」
——『職務にて』をめぐって

Проблема “общей мысли”
в рассказе Чехова « По делам службы »

Кадзухиро ХАТАНО

秦 野 一 宏

I

チェーホフの主人公たちの多くは、自身の生の意味を感じることができないでいる。何が正しいのか確信できず、不安から生そのものを恐れる者もいれば、生きる支えを失い、自暴自棄になって自ら命を絶とうとする者もある。「信念なくしては人は生きてゆけない¹⁾」とチェーホフは「手帖」に書き記しているが、その「信念」が彼らには見つからない²⁾。

「信念」があっても、『退屈な話』(1889年)の老学者ニコライ・ステパノーヴィチのように、その効力が疑わしくなることもある。彼の生きる拠り所は「科学」であった。人類は「科学」によってのみ、自然にも自分にも打ちかつことができるのだと、彼はずっと信じつづけてきたのだけれど、死を目前にすると、盤石であったはずの信念がぐらつく。以前は自分を「王様」のよ

うに感じていたのに、今は悪意や憎悪、恐れといった「奴隷にふさわしい」感情が心に巣くう。ニコライ・ステパノーヴィチの「信念」は病や老い、死といった避けられないもの、人の生活に否応なく入りこんでくるものを意味づけることができなかったのだ。彼は「外からのどんな影響よりも高くで強いもの」が必要であることを痛感し、あらゆるものを結びつけている「共通理念」を渴望するが、どのようにしてそれを見つけ出せばよいのか、わからぬまま、盲目なる偶然の支配する世界でわびしく、自身の最期を迎えるのである。

いったいなぜ、老学者は「共通理念」を得ることができなかったのだろうか。また、チェーホフは『退屈な話』以降、「共通理念」の問題にどのように取り組んだのだろうか。この問いかけに対するシェストフの回答はじつに明快である。いわく、チェーホフは「共通理念」が「尊敬すべき事物」であることを完全に認め、これを求めて「全力を挙げて闘った」が、その労苦もむだに終わった。なぜなら、いくら奮闘しても「共通理念」はいつも「偶然」を前にして歯が立たないからだ。その晩年には、チェーホフは「あらゆる観念の勢力から逃れ、又世の中の出来事を連絡する意味を亡失してしまった³⁾」。——シェストフは作者チェーホフを『退屈な話』の主人公とまったく同一視している。彼にしたがえば、老学者ニコライ・ステパノーヴィチの行き詰まりはそのまま、チェーホフの生涯の行き詰まりということになるが、これで万事終われりではチェーホフも浮かばれまい。何より、「共通理念」を求めて「全力を挙げて闘った」証である『職務にて』(1899年)の存在を無視しているのは公平さを欠く。この小説を視野に入ればおそらく、『退屈な話』の老学者が「共通理念」に手が届かなかった理由も十分に理解できるようになるだろう。

『職務にて』の舞台はモスクワから千キロ離れた僻地の村である。予審判事代理のルイジンは医師のスタルチェンコとともに、レスニーツキイという男の死体を解剖するために「職務で」この村にやってきた。到着の時刻が予

定より遅れ、夕方になってしまったので解剖は明日ということになり、二人は死体の置かれた郡会のみすぼらしい宿泊所を出て、一夜を3キロ離れたタウニツというドクトルの知り合いの地主の家で過ごすことにする。外は吹雪で、彼らの乗った馬車は幾度も道に迷いそうになったけれども、どうにか屋敷にたどりつくことができた。タウニツ邸には美しい令嬢たちがいて、彼女たちの歌を聞いたり、いっしょに踊ったりしながら楽しい時を過ごしたあと、ルイジンはふと、わびしいもの思いに駆られる。

「(…)今まわりにあるのは生活ではなくて、生活の一片、断片なんだとか、ここでの一切は偶然のもので、どんな結論も出すことはできないのだとか、ずっとそんなことを彼〔ルイジン〕は考えていた。文化的環境から遠く離れたこの辺鄙な田舎、地方で暮らし、ここで生涯を終えるこれらの娘達を憐れにさえ思った。あの文化的環境でなら、何も偶然的なものはなく、すべては意味をもち、理にかなっている。たとえば、どんな自殺でも理解でき、なぜ自殺したのか、またそれが共通の有為転変の中でどのような意義をもつのか説明できる。もしこの片田舎での生活が自分に理解できず、もし、その生活が自分に見えないのだとしたら、それはつまり、ここには生活そのものがないということだと、彼は考えた⁴⁾。」(引用A)

26歳のルイジンは5年後か、あるいは10年後にはこの僻地を離れ、モスクワに舞い戻ることができると信じている。文化の巷であるモスクワで、特別な重要事件の予審判事として活躍したり、社交界の花とうたわれたりする日を彼は待ち望んでいる。その輝かしい未来の〈高み〉に身を置くルイジンにとって、この僻地はいわば「形式上」存在するだけであり、人も生活も一切は無縁で、「偶然的なもの」にすぎず、時にはその住人は「憐れにさえ」思えるのである。一方、『退屈な話』の高名な老学者は、輝かしい過去の〈高み〉から、死を前にしてうろたえる自分の姿を見下ろして、世界の無意味で

あることに慄いている。ルイジンが一人の男の自殺の「意義」を説明できないように、老学者は自分を待ち受ける死の唐突さが理解できない。——このように比較してみると、二人はその年齢差にもかかわらず、精神的には双生児のような印象を与えるが、そこには決定的な違いがある。つまり、老学者が不動で、形を変えないのに対し、ルイジンは成長するのである。彼は、〈高み〉を降り、〈別の世界〉の存在を認めないようになる⁵⁾ばかりか、あらゆる人々のあいだには「必然的な結びつき」があるという認識にまで到達した。

「彼〔ルイジン〕には、この〔自殺した〕保険代理人と百人長の生には何か共通するものが実際あるような気がした。実生活にあっても、彼らは「夢で見たように」互いに支え合いながら、並んで歩いているのではないか。目には見えないが、ある重要な、必然的な結びつきが、彼ら二人のあいだに、いや彼らとタウニツのあいだにも、あらゆる人、まさしくあらゆる人々のあいだにも存在している。この生にあっては、最も荒涼とした僻地であってさえ、何ごととも偶然には起こらない。一切はひとつの共通の思想に充たされ、一切はひとつの魂、ひとつの目的をもっているのだ⁶⁾。」(引用B)

ここで言う「共通の思想 *общая мысль*」が、『退屈な話』の「共通理念 *общая идея*」と重なるものであることは言を俟たないだろう。この「共通の思想」(あるいは「共通理念」)に関わって何より重要なのは、「目には見えない」人々の結びつきである。引用Aでは、人々の生活が「見えない」とすれば、生活の存在そのものもないのだと考えられていたが、ここではたとえ見えなくとも存在するものがあると見做される。「見えない」のは〈私〉にとって見えないのであって、見えないものを「ない」と断定するのは取りも直さず、〈私〉を絶対視することである。言い換えれば、〈私〉を絶対視するような観点からは、「共通の思想」など生まれるはずもないということに

なる。〈高み〉に身を置いていたからこそ、老学者は「共通理念」に近づけなかったのだ⁷⁾。

もちろん、このように見えないものの存在を強調したり、出来事は偶然には起こらないなどと力説したりすれば必ず、それはどのようにして証明するのだと難詰される。そのような声に答えるかのように、ルイジンの考えは続く。「そのことを理解するためには思うだけ、考察するだけでは足りないのであって、さらにその上に、生を洞察する才能を、すべての人には与えられていないらしい才能を持ちあわせていなくてはならないだろう⁸⁾。」

「才能」が必要だと言われてしまえばそれまでだが、チャーホフが力点を置いているのはむしろ、「思うだけ、考察するだけでは足りない」という一節だろう。しかし、チャーホフが言うように、「登場人物の述べる意見を作品の根^{ステイタス}幹として扱うべきではない⁹⁾」。ここでのルイジンの言葉も当然、ルイジン自身にはねかえってくるわけで、こんなふうに問うことも可能である。——ルイジンはあらゆる人々に「必然的な結びつき」があると考えているけれど、考えるだけでは足りないのではないか。一切は「共通の思想」に充たされていることをルイジンが理解したとすれば、そこにはどんな洞察があったのか。作者が小説世界の中で、この問いに答えることができなければ、ルイジンの到達した認識も結局のところ、砂上の楼閣となりはててしまうだろう¹⁰⁾。

我々が細心の注意をはらって検証しなければならないのは、ルイジン自身も意識していない彼の内的な変化の過程である。

II

ルイジンの認識の変化は、自殺者レスニーツキイに対する彼の態度の変化と深く係わっている。

自殺者に対するルイジンの態度は、最初はまったく冷やかなものであった。

一例をあげよう。医師のスタルチェンコは自殺者を「神経衰弱患者」の一人であると決めつけ、彼らはみな自分の事しか考えないエゴイストだと憤慨するが、このドクトルの言葉に対し、ルイジンは「あくびをしながら」答える。何と答えたかは記す必要はないだろう、その答え方がすべてを語っている。「レスニーツキイ」という名前も、ルイジンにとっては意味をもたなかった。彼が目にするのは、職務上の、解剖を必要とするただの「死体 тело (= 物体)」にすぎない。「白い布で被われた長い死体がじっと横たわっていた」と地の文に記されているが、「長い」死体という即物的な表現は、自殺者に向けられたルイジンたちの視線の冷やかさを余すところなく伝えている。

このモノとしての死体が、ルイジンにとって単なる「死体」ではなくなってくる（死と再生という、何だかものものしいが、チャーホフもまた、彼流の控えめなやり方で、復活のテーマと取り組んでいる¹¹⁾）。「死体」が生きた人間として甦る機縁を与えたのは、隣村に住んでいたという百人長の回想であった。

ルイジンが自分の方からレスニーツキイについて尋ねたわけではない。レスニーツキイを子どもの頃からよく知っていた百人長が、問わず語りに故人の話始めたのだ。ドクトルはいない、聞き手はルイジン一人である¹²⁾。彼は相手の話を黙って聞きつづけた。レスニーツキイの父親が自分の妹の地所を横領したこと、その父親が教会を破門され、懺悔することもなく頓死したこと、父親の死後、抱えこんだ多額の借金のため、レスニーツキイがぐやしい思いをしたこと……。何気なく、聞くともなく聞いているだけなのだが、百人長の話はルイジンの潜在意識に刻みこまれ、「死体」に対する彼の感情を変えてゆく。「それから、若旦那のセリョージャは何から何まで借金のかたに取られてしまいました¹³⁾」。百人長の用いる「セリョージャ」という愛称からも分かるように、話は単なる事実の伝達ではない。百人長が復現するレスニーツキイ像には、親しくしていた人間の感情が移入されているのである。百人長はさらに、「セリョージャ」が郡会の代理人として保険の

仕事をするようになったいきさつを語り、こう言い添える。

「が、旦那は若いし、気位も高いんで、もっと豪気にやりてえ、目立ちてえ。で、荷馬車に乗って郡じゅうをあくせく走りまわったり、百姓と話をするのがいまいましい。歩いている時も、いつも地面を見てばかりで、黙ったままさ。(…) お父っつあんは金持ちなのに、自分は貧乏だ、いまいましい¹⁴⁾。」

「もっと豪気にやりてえ、目立ちてえ」と思う心は、ルイジンだって変わらない。自分は僻地で燻っているのに、かつての同輩仲間たちはペテルブルグやモスクワで「文化的な」生活を楽しんでいるのかと思うと、たまらない気持ちになる。「いまいましい」という言葉は、ルイジン自身の心情を代弁するものでもあったのだ。——百人長の回想によって、レスニーツキイの自殺は、意識されない心中の奥深くではすでに身近なものとなっている。

その後、百人長が話を終えて2時間半ぐらいの時間が過ぎ、眠けで「思考力がもつれはじめた頃」、突然、今まで意識の奥深くに潜んでいたレスニーツキイの記憶が蘇る（回想が記憶を突ついたのだ）。ルイジンはレスニーツキイの静かな声を思い出し、歩きぶりを思い浮かべる。と、いま誰かが、レスニーツキイそっくりの歩き方で歩いているような気がした。「突然、恐ろしくなって、背筋に寒気がはしった¹⁵⁾」。

ルイジンは、最初に「長い」死体を見た時には「不愉快だ нехорошо」、「気味が悪い жутко」と思ったが、けっして「恐ろしい страшно」とは感じなかった。それは、死体が自分とは無関係だと確信していたからである。彼はレスニーツキイの記憶が蘇る直前に、次のように考えていた。「もしもこの男〔レスニーツキイ〕がモスクワか、どこかモスクワの近郊で自殺をして、予審を開かねばならぬとしたら、興味も湧き、重大でもあり、死体の隣りに寝るのが恐ろしくもあっだろう¹⁶⁾」。ルイジンはもう、モスクワから遠

く離れた僻地での自殺だって恐ろしいのだと、無意識のうちに認めている。彼はこの恐怖体験のあともまだ、僻地での自殺には意味がなく、理解不能だと考えつづけているが（引用Aを見よ）、この「考え」の地盤はきわめて脆いと言わなければならない。

しかし、この段階ではレスニーツキイの死が自分と無縁のものではないとたとえ自覚できたとしても、ルイジンはレスニーツキイとの「結びつき」を「必然的 необходимая」だと思えたかどうか。

III

百人長に代わって、ルイジンを〈導く〉のは元検事のタウニツである。

タウニツ邸でもやはり、レスニーツキイの自殺が話題に上がったが、ここでは百人長がまったく触れなかった事実、つまり、レスニーツキイには妻と一人の子どもがいたことが明らかになる。レスニーツキイを「神経衰弱患者」と呼ぶ医師のスタルチェンコは、「神経系統のおかしい連中」には結婚を禁止し、同種族をふやす権利を剥奪すべきだと、自説を開陳した。これに対して、タウニツは妻子を残して自殺したレスニーツキイの心中を思い遣って、次のように語っている。

「不幸な青年だ。自分の命……自分の若い命を捨てようと決心するまでには、どんなに思案し、苦しまねばならんか。どんな家庭にでもこうした不幸は起こりうるわけですが、辛いことです。そりゃあ耐えがたい、やりきれないことだ……¹⁷⁾」

地主で元検事のタウニツと保険代理人のレスニーツキイでは、境遇も違う。二人は親しい間柄でもなかった。にもかかわらず、タウニツには、レスニーツキイの心の痛みを察することができるのである。それは、タウニツ

自身が2年ほど前に妻を亡くし、今もその辛さを味わいつづけているからだ（「何かを話すたびに、彼は妻のことを思い出す」）。思い起こせば、あの「お父っつあんは金持ちなのに、自分は貧乏だ、いままいしい」と語った百人長にも、タウニツと「共通するもの」があった。百人長も以前は「かなりな暮らし」をしていたが、働いても働いても貧乏になるばかり。それというのも、彼の息子たちが「口じゃ言えねえほど」ウォッカをがぶのみして、^{しんしょう}身 上をつぶしてしまうからだ。百人長にレスニーツキイの「いままいしい」気持ちが理解できるのは、彼自身が同じように辛い思いをしているからこそである。

ところで、レスニーツキイや百人長、タウニツたちが互いに、自分の不幸を通じて結びついているとすれば、ルイジンは彼らの「共通するもの」とどのように関係するのだろうか。「共通の思想」をめぐるルイジンの考えは、こんなふうに締め括られていた。

「不幸な、疲れはてた、みずから生命を断った、ドクトルのいわゆる《神経衰弱患者》にしても、生涯、毎日人から人へと渡り歩くあの老人〔百人長〕にしても、——それは自分の存在を偶然だと考えている人にとっては偶然であり、生の断片である。一方、それは、自分の生もそうした共通するものの一部と考え、その共通するものを理解している人にとっては、奇蹟だが合理的な、ある一つの有機体の一部なのである¹⁸⁾。」

ルイジン自身、自分の生が「共通するもの」の「一部」と感じていなければ、こんな考えは生まれない。とすれば、彼をそのように感じさせたものは何か。

タウニツとの出会いである。死んだ妻のことがあきらめきれず、妻のことばかり話す彼は、声までが「孤児のようだ」。その声を壁越しに聞きながら、ルイジンは考えた。「ぼくもいつか、あんな身の上になってしまうんだらう

か¹⁹⁾」と。

タウニツの身の上は、潜在的にすべての人間の身の上なのである²⁰⁾。レスニーツキイに降りかかった不幸もまた、タウニツの言葉通り、「どんな家庭でも…起こりうる」のだ。チェーホフは『すぐり』(1898年)の語り手である獣医師にも同じことを言わせている。すなわち、どんなに幸せな人間であっても、「遅かれ早かれ」人生はその爪を見せ、「病氣や貧乏、近親者の死と言った不幸」が降りかかるのだと²¹⁾。——ここから、人は絶対的に平等であるという考えが生まれる。名誉や地位、金など、人を差異化する一切のものは、潜在的不幸を前にすれば、掻き消えてしまう。またここから、人は同じ潜在的不幸を抱えた人を気づかうべきだという考えが生まれる。いま、自分が他の人々をかえりみなければ、不幸が襲ってきた時(それは必ず来るのだ)、他の人々も自分をかえりみないだろう。人は人に無関心ではいけないのだ。——「あらゆる人々のあいだ」に「必然的な結びつき」がある、「一切はひとつの共通の思想に充たされ」という引用Bで示された考えは、このようにして(〈タウニツ〉を經由して)生みだされてくるのである。

IV

さて、これまでルイジンがどのようにして世界に対する認識を変えたかを見てきたが、まだ一つ、検証しておかなければならないことが残っている。ルイジンは、「共通の思想」を理解するためには「考察する」だけではだめで「洞察する」ことが必要だと考えていた。しかし、作者であるチェーホフの立場から言えば、思想は「洞察する」だけでなく、実際に生きられなくてはならないし、生きられない思想は絵に描いた餅で、単なる言葉にとどまるだろう。

物語の展開に即して具体的に言えば、こういうことになる。レスニーツキ

イはたしかに〈人間〉として復活したが、ルイジンと復活したレスニーツキイのあいだには、本当に「必然的な結びつき」が出来ているのだろうか。

ルイジンと医師のスタルチェンコはタウニツ邸で一夜を過ごした。翌朝8時には死体の安置された郡会の宿泊所に出発する予定だったが、朝になってみると吹雪が荒れ狂っていて、タウニツ邸から出てゆけない。医師はロシア人の性格に影響を及ぼす厳しい自然や、行動の自由を狭め、人間の知的成長を抑えつける長い冬について話しはじめた。ルイジンはいまいまいしい思いで、その「考察 рассуждение」を聞き、荒れ狂う吹雪を窓越しに眺めながら、陰気に考える。

「こんなところで、どんな道徳を引き出そうというんだ？吹雪、ただそれだけだ……²³⁾」

自然の力には抗し難い。だから良心の痛みなんて感じなくてもいい。これは『わが人生』(1896年)のマーシャの考えである(「家畜の群のような無知や飢え、寒さ、退廃などと言った自然の力に立ち向かって、いったい何ができるのかしら？²³⁾」)。また、〈自然の力〉を「必然性」と読み変えるならば、それは『無名氏の話』(1893年)のオルロフの考え方になり、〈自然の力〉の中に病や老い、死を含めるならば、『退屈な話』のニコライ・ステパノーヴィチの考え方とも繋がる。彼らはみな、こんなふうに感じている。私はたしかに意気消沈して倒れてしまったけれども、だからといって何も私が悪いんじゃない……。このような個の責任を認めない考え(あるいは感覚)からは、「共通理念」や「共通の思想」はけっして生まれまいだろう。自分を〈高み〉に置いて〈私〉を絶対視したり、〈私〉を喪失すれば、「共通するもの」など存在しなくなる。

もしもルイジンのこの言葉が淡々と、悟りきった調子で言われたのであれば、そしてこの一句で小説が終わっていたならば、私もシェストフと同様

に、チェーホフを、人間の希望を殺す「絶望の詩人」と呼んで憚らない。しかし、チェーホフには次の一節が続くのである（多読点がそのことをすでに予感させていた）。

「正午に昼食をとり、それからあてもなく、家じゅうをぶらぶらしては、窓辺に近寄っていった。

『だが、レスニーツキイがあのままなんだ。』吹きだまりの上の猛烈な勢いで渦まいている雪の竜巻を眺めながら、ルイジンはこう考えた。『レスニーツキイがあのままだし、立会人たちが待っている……』²⁴⁾」

ルイジンには、レスニーツキイのことがどうしようもなく、気に掛かるのである。その思いの強さは、時の経過（「正午に昼食をとり…」）にもかかわらず、前の発話を直接受け取る接続詞「だがa」が用いられていることから分かる。この「だが」は、「考察」や論理ではなく、「不幸な」レスニーツキイを思う感情に突き上げられて出現した。——ルイジンの思想は画餅ではなかったのだ。

物語はまだ終わらない。

吹雪がおさまった翌朝、夜明けとともにルイジンたちが出発しようと外へ出てみると、全身雪まみれになり、顔をまっかにさせた汗びっしょりの百人長が立っていた。「皆の衆がえらく心配しておりますんで。飢鬼どもが泣いておりますんで」と、純朴そうな微笑を浮かべながら彼は言う。百人長に言わせれば、これも勤めだというということになるだろうが、彼のひたむきな行動の根底には、ルイジンの〈気掛かり〉に通じる「共通の思想」がある²⁵⁾。

みんなから軽くあしらわれ、自分でも「値打ちのない人間」だと信じこんでいる老人。働きどおしのくせに、貧乏のどん底にいる老人。それでも、この老人の心の中には、「この世じゃ嘘は長続きしない」という深い確信がある。若いルイジンは、これから先の人生で、この百人長に似たたくさんの老

人たちと出会うことになるだろうと予感している。この予感は最初は、生きてゆくことの味気なさ、「わびしさ」を呼び起こしたけれど、自分も彼らと同じ「有機体」の一部であり、「生の重荷」を背負った彼らと自分のあいだには、「必然的な結びつき」があるのだと思い至ったのちは、その予感の意味あいも変わるだろう。

注

- 1) Чехов А. П. Полное собрание сочинений и писем: В 30 т. Сочинении. Т. 17. М., 1980, с. 35. (以下、本全集を『チェーホフ 30 巻全集』と略記する。)
- 2) おそらく、19 世紀 80 年代から 90 年代にかけての精神状況が反映しているの
だろう。1892 年 11 月 25 日付のスヴォーリン宛の手紙の中で、チェーホフは自
分たちの沈滞した、わびしい時代についてこう語っている。「われわれには手近
な目的も、遙かな目的もない。我々の心の中はがらんだ。我々には政治はな
い、革命は信じちゃいないし、神もない。幽霊だって恐がらない」(『チェーホ
フ 30 巻全集』書簡篇第 5 巻、133 頁)。
- 3) レオ・シュストフ、河上徹太郎訳「虚無よりの創造」(原卓也編『チェーホフ研
究』中央公論社、1969 年、所収)、15 頁。ただし、“общая идея” の訳であ
る「一般的な概念」は、小論では「共通理念」に変えた。
- 4) 『チェーホフ 30 巻全集』作品篇第 10 巻、97 頁。[] も下線も筆者のもの。
以下同じ。
- 5) 〈別の世界〉に脱出することを望む者は、チェーホフの登場人物の中にも多く
いる。しかし、その脱出は結局のところ、虚構の〈希望のイメージ〉にすぎな
い。スヒフ氏の指摘しているように、リーパ(『谷間』)やラエーフスキイ(『決
闘』)といった作者に希望を託された主人公たちは脱出しない(Сухих И. Н.
Проблемы поэтики А. П. Чехова. Л., 1987, 165 頁)。
- 6) 『チェーホフ 30 巻全集』作品篇第 10 巻、99 頁。
- 7) たとえば、娘の恋人グネッケルについて彼はこう語っている。「……グネッケル
のような人々となると、自分の功績が雲にそびえる高い山のような気がする。麓

には、見えるか見えないかわからぬくらいのグネツケルどもがうごめいている」
（『チェーホフ 30 巻全集』作品篇第 7 巻、279 頁）。

- 8) 『チェーホフ 30 巻全集』作品篇第 10 巻、99 頁。
- 9) 1889 年 10 月 23 日付、スヴォーリン宛書簡。『チェーホフ 30 巻全集』書簡篇第 3 巻、271 頁。
- 10) ベルドニコフ氏は、引用 A から引用 B への認識の変化の原因を、「これまでも少なからずあった月並みな出会い」に帰しているが、「月並みな出会い」をいくら重ねても人は変わらない。チェーホフの答えが氏の憶測するようなものであれば、チェーホフは作家として無責任の謗りを免れまい（Бердников Г. А. П. Чехов. Идеи и творческие искания. М., 1984, 432 頁を参照）。
- 11) この復活には神は関与しない。チェーホフはトルストイやドストエフスキイとは違って、神を抜きにして人間の復活を考えている。
- 12) スタルチェンコは、タウニツの家に出かけていて、宿泊所にはルイジンと百人長だけが残っている（のちにスタルチェンコが戻って、二人してタウニツの家に向かうことになる）。
- 13) 『チェーホフ 30 巻全集』作品篇第 10 巻、91 頁。
- 14) 同上。
- 15) 同上 93 頁
- 16) 同上 92 頁
- 17) 同上 98 頁
- 18) 同上 99 頁
- 19) 同上 98 頁
- 20) タウニツの妻はどんな女性だったのか（美しさは？気だては？）、また彼女はどんな死に方をしたのだろうか（病死？それとも自殺？）、—— その説明は一切ない。チェーホフはただひと言、「死んだ」と記しているだけである。タウニツの妻の死はつまり、何の飾り気もない、仰々しさもない〈死〉そのものである。タウニツの不幸は、この〈死〉そのものに由来するものであるからこそ、すべての人に関わってくる。
- 21) 『チェーホフ 30 巻全集』作品篇第 10 巻、62 頁。
- 22) 同上、100 頁。
- 23) 同上、第 9 巻、259 頁。
- 24) 同上、第 10 巻、101 頁。

- 25) 翻って『退屈な話』のニコライ・ステパノーヴィチを見れば、彼には、誰かのことを気づかうということがない。彼の頭は自分の不幸でいっぱい、周囲の者の辛さがわからない。泣いて救いを求めているカーチャに、彼はひと言のやさしい言葉もかけず、自分の葬儀に彼女が来てくれるかどうかを気にしている。